

溝端遺跡発掘調査報告

—— 飯南郡飯南町粥見 ——

1 9 9 6 · 3

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は先人達の遺産として、現在に生きる私達すべての共有財産であると同時に、未来の人々に対してこれを伝えて行く義務を、私達は負っています。

一方で開発事業による新たな道路整備は、現在の私達の生活を豊かにするとともに、次世代の人々にも利益を与えるものです。

しかし、これらの開発事業により祖先から受け継いできた遺産である埋蔵文化財が、現在の私達自身の手で消滅させてしまうことがあります。

もとより、各関係機関のご理解とご協力により極力埋蔵文化財の現状保存には努めておりますが、やむを得ず、現状保存が不可能な部分については発掘調査を実施し、記録保存を図っております。

今回、国道368号線粥見バイパスの建設に伴い、溝端遺跡の現状保存が不可能な部分についての調査が終了いたしましたので、ここに報告をいたします。

なお、調査にあたりましては県土木部道路建設課、松阪土木事務所、飯南町教育委員会、飯南町建設課及び地元の方々から多大なるご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成8年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

例　　言

- 1 本書は、三重県教育委員会が、三重県土木部から執行委任を受けて実施した一般国道368号線粥見バイパス道路特殊改良工事事業に伴う溝端遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
 - 2 調査は以下の体制で実施した。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第1課
主事 筒井正明 主事 西出 孝
調査協力 三重県土木部道路建設課 松阪土木事務所 飯南町教育委員会 飯南町建設課 地元各位
 - 3 調査面積 3,400m²
 - 4 調査期間 平成7年8月7日～11月20日
 - 5 遺構の実測・写真撮影は、担当者及び調査第1課臨時技術補助員山田康博が行った。
 - 6 本書の執筆にあたっては、奥 義次氏（三重県立松阪高等学校教諭）、大下 明氏（雲雀丘学園中・高等学校教諭）、久保勝正氏（三重県立上野商業高等学校教諭）の指導・助言を受けた。
 - 7 本書の作成にあたっては、三重県埋蔵文化財センター調査第1課及び管理指導課の下記の業務補助職員が補佐した。
森島公子、中山豊子、西村秋子、柳田敬子、足立純子、柿原清子、須賀幸枝、小林佳代子、杉原泰子、猪 純子、堀内博子、石橋秀美、松本春美、武村千春、有川芳子、田中美樹、富楽幸子、早川陽子、井田美奈子、浜崎佳代、松月浩子、豊田幸子、井村浩子、倉田由起子、川口 愛、西田衣里、中川章世
 - 8 遺物の写真撮影及び本書の執筆、編集は筒井がおこなった。
 - 9 国面における方位は全て真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏約6°20'（昭和61年）である。
 - 10 本書に使用した事業計画図面は、土木部の提供による。
 - 11 本書に用いた遺構表示略記号は、下記による。
SD : 溝 SK : 土坑 SZ : 不明遺構・その他
 - 12 本書に報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前言	1	2. 編序と地形	5
II. 位置と歴史的環境	1	3. 遺構	8
III. 遺構	5	IV. 遺物	14
1. はじめに	5	V. 結語	16

挿図・表目次

第1図 遺跡位置図	2	第8図 SK17遺物出土状況図	11
第2図 遺跡地形図	3	第9図 SZ20流路想定図	12
第3図 調査区位置図1	5	第10図 SZ20杭列部分遺構実測図	13
第4図 調査区位置図2	5	第11図 出土石器実測図	14
第5図 漢構平面図	6～7	第12図 SK17出土遺物実測図	15
第6図 調査区土層断面図	9～10	第13図 SZ20出土遺物実測図	15
第7図 SK17遺構実測図	11	第1表 出土遺物観察表	17

写真図版目次

図版1 A地区全景	図版6 SZ20
図版2 B地区全景 C地区全景	図版7 出土遺物
図版3 D地区全景 SK17	図版8 出土遺物
図版4 SK17	図版9 SZ20杭
図版5 SK1 SK2 SD9 SD11	

I. 前 言

1. 調査にいたる経過

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。こうした中で、三重県土木部道路建設課から、国道368号線粥見バイパス国補道路改良工事事業計画の回答を受け、三重県埋蔵文化財センターが、遺跡分布調査を実施した。その結果、事業地は北出遺跡の範囲内にあることが判明した。センターでは、詳細な遺跡の実態を把握するため平成5年3月に試掘調査を実施し、その結果北出遺跡B地点の範囲を確定した。この取り扱いについては、その保護に努めるよう県土木部道路建設課・松阪土木事務所と、県教育委員会文化芸術課・三重県埋蔵文化財センター間で協議を重ねたが、現状保存が困難なために、やむなく発掘調査を実施して記録保存をすることとした。また発掘調査開始に当たり、調査区の小字名の大部分が「溝端」であることから、溝端遺跡と改称した。

調査は県土木部道路建設課の執行委任を受け、平成7年8月7日～11月20日に実施した。なお調査に

あたっては、県土木部道路建設課、松阪土木事務所、飯南町教育委員会、飯南町建設課に御協力をいただいた。また、以下にお名前を記した地元の方々には発掘調査作業に従事していただいた。改めて感謝の意を表したい。

杉板 齋、井上利二、大久保善平、小阪光夫、野呂 平、森本一夫、青木幸子、岡田敏子、河村正子、森田 敏、中村とき江、松倉とみ代、上林 勝、中村はるへ、中西ゆき子、中西和美、北垣戸つるへ、杉浦なお、磯田タチ、下部とよ、島本たみあ、磯田順子、松本郁代

(順不同 敬称略)

2. 調査の方法

調査は、遺構面に影響のない範囲で重機による表土除去をおこなった。

小地区的設定に当たっては4m×4mを基準とし、西から東へアルファベット（小文字で表示）を、北から南へ数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。また便宜上調査区を4区に分け、南東から北西へそれぞれA・B・C・D地区とした。

II. 位置と歴史的環境

三重県と奈良県を境する高見山に源を發し、伊勢湾に注ぐ櫛田川は延長約84.7kmに及ぶ河川であり、中流域の飯南町内で大きく迂回する。この飯南町内で、高見峠越から櫛田川流域を沿う近世の要路である和歌山街道（現国道166号線）に、初瀬（伊勢）本街道と 和歌山別街道（共に現国道368号線）が交差する。溝端遺跡（1）は、櫛田川西岸の、標高約111.32～109.47mの河岸段丘上に位置し、行政上は飯南郡飯南町粥見字溝端・桜東新田に属す。

櫛田川流域には縄文時代の遺跡が多く分布し、飯南町内にも遺跡がいくつか確認されている。この内、堂之庭（2）、足ヶ瀬（3）、イイ谷（4）、上ノ垣外（5）、下中切（6）、波留（7）等の遺跡から尖頭器が確認されている。なかでも、下中切遺跡は有舌尖頭器を含め、尖頭器の分布として櫛田川最

奥部の例である。また波留遺跡は、有舌尖頭器の櫛田川最奥部の確認例である。

さらに、足ヶ瀬遺跡では大鼻式・大川式の、上ノ垣外遺跡では大川式の、百合遺跡（8）からは黄鳥式の、それぞれ押型文土器が確認されており、縄文時代早期前半の遺跡が密集する。

一方、早期末葉～晩期にかけては、飯南町内では、現段階において断片的な資料しか確認されていない。しかし、隣接する勢和村にはアカリ遺跡、浜井場遺跡、宮切遺跡、新神馬場遺跡等前期から晩期にかけても、比較的良好な遺跡が確認されている。

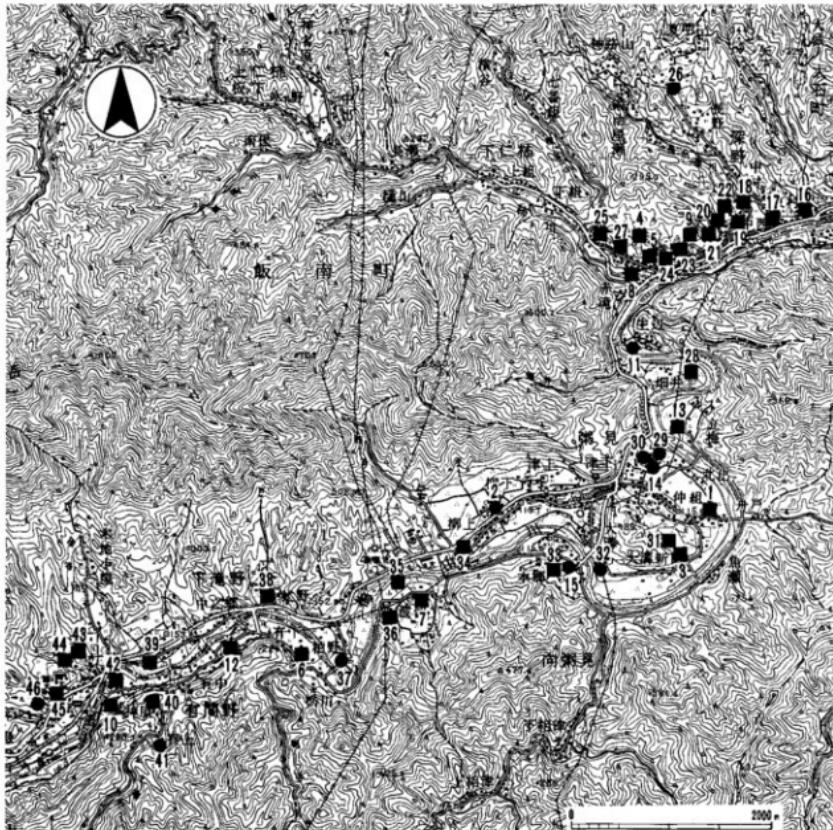
ところで、櫛田川流域の縄文時代の遺跡分布から注目される点の一つは、いわゆる「サヌカイトの道」の存在である。これは櫛田川流域および知多半島を中心とする三河地方の縄文～弥生時代の遺跡から出

土するサスカイトが、二上山産であることが理学的に確認されたことにより提唱されたものである。

のことから、畿内と伊勢・東国を結ぶ高見越の経路は、縄文・弥生時代にまで遡る可能性が高い。現に縄文時代後期末葉には石器の石材として在地のチャートよりもサスカイトの使用が一般化している。この時期には、飯高町宮ノ東遺跡や勢和村新神馬場遺跡等の拠点的な遺跡が出現するが、高見峠をはさんで奈良県側、吉野川流域に位置する宮滝遺跡等に

対する、櫛田川流域の物流の拠点的な遺跡と解することができるであろう。飯南町内でも、29遺跡でサスカイト製の石器等が多く採集されている。この櫛田川ルートの初現時期は不明だが、玉城町のカリコ遺跡、明和町の北野遺跡等の旧石器時代の遺跡からも、少量ながらサスカイトが確認されている。

弥生時代以降、櫛田川流域の遺跡は下流域に集中する傾向があり、下流域の平野部を中心に集落形成が進んでいったことを示すものと思われる。飯南町



- 1.清瀬 2.堂之底 3.足ヶ瀬 4.斐谷 5.上ノ垣外 6.下中切 7.波留 8.百合 9.嚴道内 10.上山下 11.生辺 12.宮野 13.立梅
- 14.小林 15.奈加切 16.東沖 17.西沖 18.櫛田畑 19.大西 20.宮ノ西 21.境ノ 22.留谷 23.チカ木東 24.チカ木西 25.森ノ東 26.広
- 27.横谷道ノ上 28.ニゴリス 29.川ノ上 30.井戸 31.上ヶ所 32.二つ岩 33.中山 34.奥新田 35.北波留 36.川ノ上 37.丸山 38.丸野
- 39.枇杷野 40.上ノ原 41.小山 42.上川ノ上 43.妻野 44.奥ノ広 45.堂山 46.宮ノ上

図中の■はサスカイト出土遺跡

第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院 丹生 1:50,000]

内における弥生時代の遺跡としては、上ノ垣内遺跡で中期前半の壺形土器の破片が見られる他、少數の遺跡で若干の弥生土器片が確認されるにとどまる。しかしながら、殿垣内遺跡（9）や飯高町の込垣内遺跡、宇栗子遺跡等櫛田川上流域にも遠賀川系土器が確認され、宮川流域の遠賀川系土器の分布との比較から、弥生時代の西からの文化伝播における櫛田川流域の重要度が示唆されている。

一方、古墳時代に至っては、櫛田川上流域及び中流域の飯高町・飯南町地内は空白城といえる状況となる。

古代の当遺跡周辺は、飯高郡に属したと考えられ、

飯高氏の支配にあったことは推測できるものの、やはり撲点的な集落を確認する資料は無い。

飯高氏没落以後、当地は伊勢神宮の勢力下にあつたと思われ、粥見・苦木・寒河の各御園や滝野御厨が、この地域のものとして確認できる。特に粥見御園は、永承4（1049）年には確認でき、天喜5（1057）年に確認できる伊勢国鐵形御麻生園等と共に、伊勢神宮の御園としては早い例である。

古代末から中世にかけての飯南町では、上山下遺跡（10）や生辺遺跡（11）、百合遺跡、宮野遺跡（12）、立梅遺跡（13）等の様に、土師器、山茶碗、青磁等の中世遺物の散布が確認される遺跡がいくつある。



第2図 遺跡地形図(1:5,000)

また、平成7年度に試掘調査が実施された小林遺跡（14）では、中世の土器類鍋・皿の破片や天目茶碗が出土し^⑨。同じく7年度に発掘調査が実施された奈可切遺跡（15）では、平安末～中世の礎立柱建物3棟や土坑等が検出されている。しかし、この時期のまとまった資料は少なく、この時期以降の遺跡は現在の集落と重複する可能性も考えられる。

中世には、伊勢神人等の伊勢神宮の勢力が伊勢湾岸を拠点に東国への海運に従事したことが、渥美・常滑陶器の分布や東国での御厨設置等の研究から、近年解明されつつある。当然拠点となる伊勢国内での、神宮の流通への影響力は多大なものであったことは想像に難くなく、伊勢国内で1,000を越える遺跡から東海産の山茶碗が出土することはそれを如実に物語っており、特に渥美・湖西型と呼ばれる山茶碗の分布の傾向から、伊勢湾岸を中心とする海上経路の影響の大きさが指摘されている^⑩。おそらく棚田川流域の当地も、その経済圏に組み込まれていたと思われる。

ところで、古代末期以降に伊勢湾を拠点に太平洋岸の東西の海上運搬をめぐって、伊勢神宮の勢力と、

【註】

- ① 奥 義次 「飯南町の遺跡」『飯南町史』 飯南町役場 1984
- ② 奥 義次、田村陽一、德樋裕昌 「〔資料〕三重県下の前半房押型土器」『研究紀要』2 三重県埋蔵文化財センター 1993 及び①に同じ
- ③ 奥 義次 「時代概観－棚田川流域の先史遺跡概観」『飯高町郷土誌』 飯高町 1986
- ④ 棚田正一 「伊勢湾をめぐる考古学上の諸問題」『図録三重の考古遺物』 三重県良書出版会 1981
- ⑤ ③に同じ
- ⑥ ①に同じ
- ⑦ 奥 義次 「主な遺跡と遺物」『三重県玉城町史』 上巻 玉城町 1995
- ⑧ 『三重県埋蔵文化財センター年報6』 三重県埋蔵文化財センター 1995
- ⑨ ①に同じ
- ⑩ ①に同じ
- ⑪ 「神風紋」「群書類從」第1輯 続群書類從完成会
- ⑫ 「太神宮御始事記」「群書類從」第1輯 続群書類從完成会

熊野山衆人・神人等の熊野の勢力との激烈な争いがあったとの指摘がある。また、治承・寿永の内乱の際、熊野権別当湛増が源義經の勢力と結び、伊勢神宮の勢力に対し脅威を与えたとの見解もあり^⑪。元暦元（1184）年、現飯南町有間野に所在したと思われる鶴野城へこもった平信兼への、源義經による襲撃は、あるいは伊勢神宮の勢力と熊野の勢力の争いをも考慮にいれる必要があろう。この観点に立てば、当地が伊勢神宮勢力の基盤の一つであり、おそらく海上交通と直結する陸路の主要地であったとも推測できる。なお、山茶碗の分布についても、伊勢国内では出土例の少ない東濃型と呼ばれる物が、和歌山県那智郡勝浦町那智山坊跡からかなりの量が出土している^⑫。伊勢神宮の御厨設置の数が比較的少ない美濃国産の山茶碗が、熊野でみられるることは、伊勢神宮の勢力と熊野の勢力との対立が関係しているかも知れない。最終的には源頼朝が伊勢神宮へ東国の大石直正の御厨を寄進する等、太平洋岸の海運を握る伊勢神宮の勢力を重視し、その経済活動を保証することとなつた。

- ⑬ ⑪に同じ
- ⑭ 『三重県埋蔵文化財センター年報7』 三重県埋蔵文化財センター 1996
- ⑮ 西出 孝 「奈可切遺跡発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター 1996
- ⑯ 大石直正 「地域性と交通」『岩波講座日本通史』 第7巻 岩波書店 1993
- ⑰ 納野善彦 「太平洋の海上交通と紀伊半島」「海と列島文化8 伊勢と熊野の海」 小学館 1992
- ⑱ 織賀友子 「尾張・三河と中世海運」「知多半島の歴史と現在」5 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994
- ⑲ 鹿澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3 三重県埋蔵文化財センター 1994
- ⑳ ⑯に同じ
- ㉑ ㉐に同じ
- ㉒ 前川嘉宏 「三重県における山茶碗の出土状況」『研究紀要』3 三重県埋蔵文化財センター 1994
- ㉓ ㉖に同じ

III. 遺構

1.はじめに

便宜上、南東から北西へA・B・C・Dの4地区の調査区を設定し、調査を実施した。A地区の小字名は溝端、B～D地区の小字名は桜東新田である。しかし、B～D地区は、昭和54年度に実施された新農業構造改善事業によって小字名が改められたもので、それ以前は大部分が溝端であったため、今回の調査区を一括して溝端遺跡として報告する。

2.層序と地形

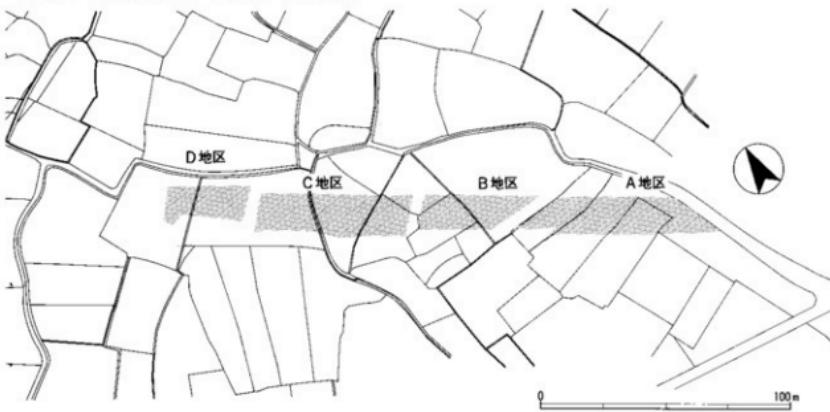
今回の調査区は、段丘の北東側の斜面に沿り、A

地区が段丘の北東側突出部、B・C地区は浅い谷部分、C・D地区は斜面の張り出し部と考えられるが、B～D地区は既には場整備が終わり、旧地形が改変されている。

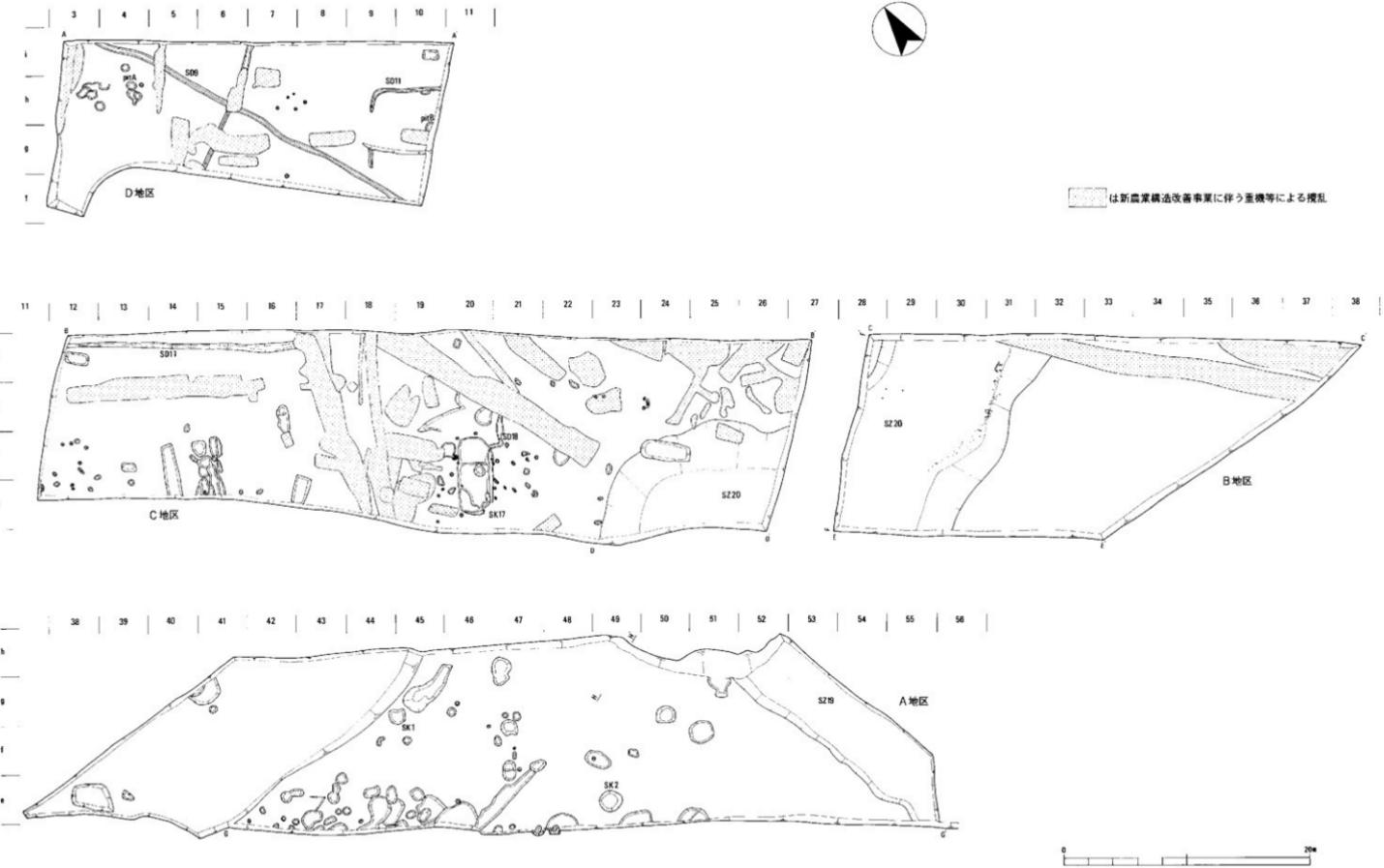
A地区の遺構検出面までの基本的な層序は、標高の高い中央部分が第1層：耕作土、第2層：灰褐色土、第3層：黒褐色砂質土（包含層）、第4層：黄褐色土（地山）で、標高の低い南東部は第1層の耕作土直下で、灰黄色土及び灰黄色砂礫層の地山に至る。北東部はかつての開墾の際に、既に大きく（おそらく



第3図 調査区位置図1 [現況] (1:2,000)



第4図 調査区位置図2 [昭和54年度新農業構造改善事業実施以前] (1:2,000)



第5図 遺構平面図 (1:300)

く地山部分を、最大約80cm程度）削平されたと思われ、第1層の耕作土直下に、灰黄色砂層に至る。

また、A地区中央部f 48～h 52グリッド付近は概ね平坦な畑地であったが、重機による表土除去の際、盛土であることが判明した。このため、盛土上面で遺構が存在しないことを確認した後に、重機によりこれを除去した結果、調査区内で最大約1.7m、調査区外東では約2m以上の盛土であることが確認できた。この盛土の層序は耕作土下に、灰黄色粘質土、褐色土に黄色土が混入する層、茶褐色土に褐色土が混入する層、暗褐色土に10～30cmの礫が混入する層、灰黄色土に1～5cmの礫が混入する層（地山）となり、第4層から若干の土師器片などの中世遺物が出土した。これらの状況から、中世以降の開墾作業によって、調査区西部の丘陵部分を削平した排土で、傾斜面に盛土をし、耕作地としたと思われる。この結果、A地区はd 44・e 44・f 44地点からd 47・e 47地点付近を頂上に北・東・南の各方向へ低くなり、調査区内でも最大約1.8mの高低差がある傾斜地の調査区であることが判明し、おそらく段丘の張り出し部の裾部分であると思われる。

一方、B・C・D地区の基本的な層序は、後述するS Z 20部分を除き、第1層：耕作土、第2層：暗褐色土に灰黄色土がブロック状に混入する層（擾乱土）、第3層：灰黄色土（地山）である。第2層が地山と同質の土がブロック状に混入する状況から、B・C・D地区は、昭和54年度の新農業構造改善事業に伴い、かなり改変されたものと推測でき、B・C地区区間の谷地形や、C・D地区的地山部分がカットされたと考えられる。

3. 遺構

調査によって検出された主な遺構は、中世の土坑と溝で、この他に谷状地形に打ち込まれた杭列を確認した。

a. 土坑

S K 1 A地区中央部北寄りのg 45グリッドを中心にして検出した。若干不整形ではあるが、一辺約1.2mの隅丸方形を呈し、深さは0.3～0.4mである。埋土は暗褐色土の単層で、若干の中世の土師器片が出土した。性格は不明である。

S K 2 A地区中央部やや西寄りのe 49グリッドで

検出した。東西約1.9m、南北約1.7mの楕円形を呈し、深さは0.25～0.33mである。埋土は黒褐色砂質土の単層で、中世の土師器片に混じって、サヌカイト製の石鎌が出土した。性格は不明である。

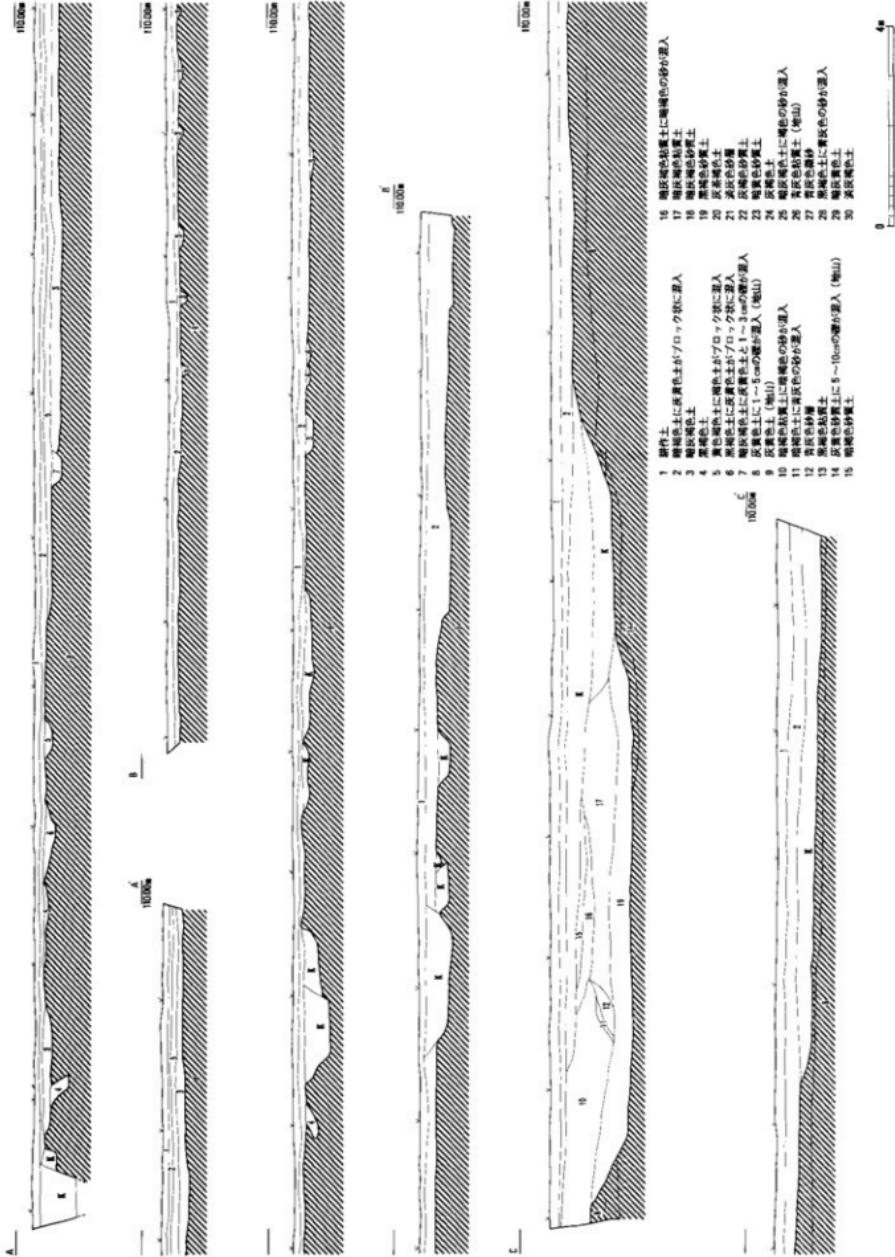
S K 17（第7図） C地区の中央やや南寄り、f 20グリッドを中心に検出した土坑である。南北約6.2m、東西約2.9mの隅丸長方形を呈し、深さは0.3～0.4mで、長軸はN39°Eである。北部の約1/3と西南隅部分が若干高く、中央部分付近が窪む。埋土は2層であり、上層が黒褐色土に黄色土が粒子状に混入する層、下層が暗褐色土に黄色土が5～10cmの大ブロック状に混入する層である。山茶碗が14個体以上、山皿が3個体以上、土師器鍋が5個体以上、土師器皿が7個体以上の他、ロクロ土師器小皿、白磁碗・皿、青磁碗等の中世の遺物が出土した。埋土および遺物の出土状況より、最終的には廃棄土坑として利用されたものと思われる。出土遺物より、12世紀末～13世紀前半のものと思われる。また、土坑の掘方に沿って、4カ所の小穴を確認した。東隅で、S D 18と重複する。

b. 溝

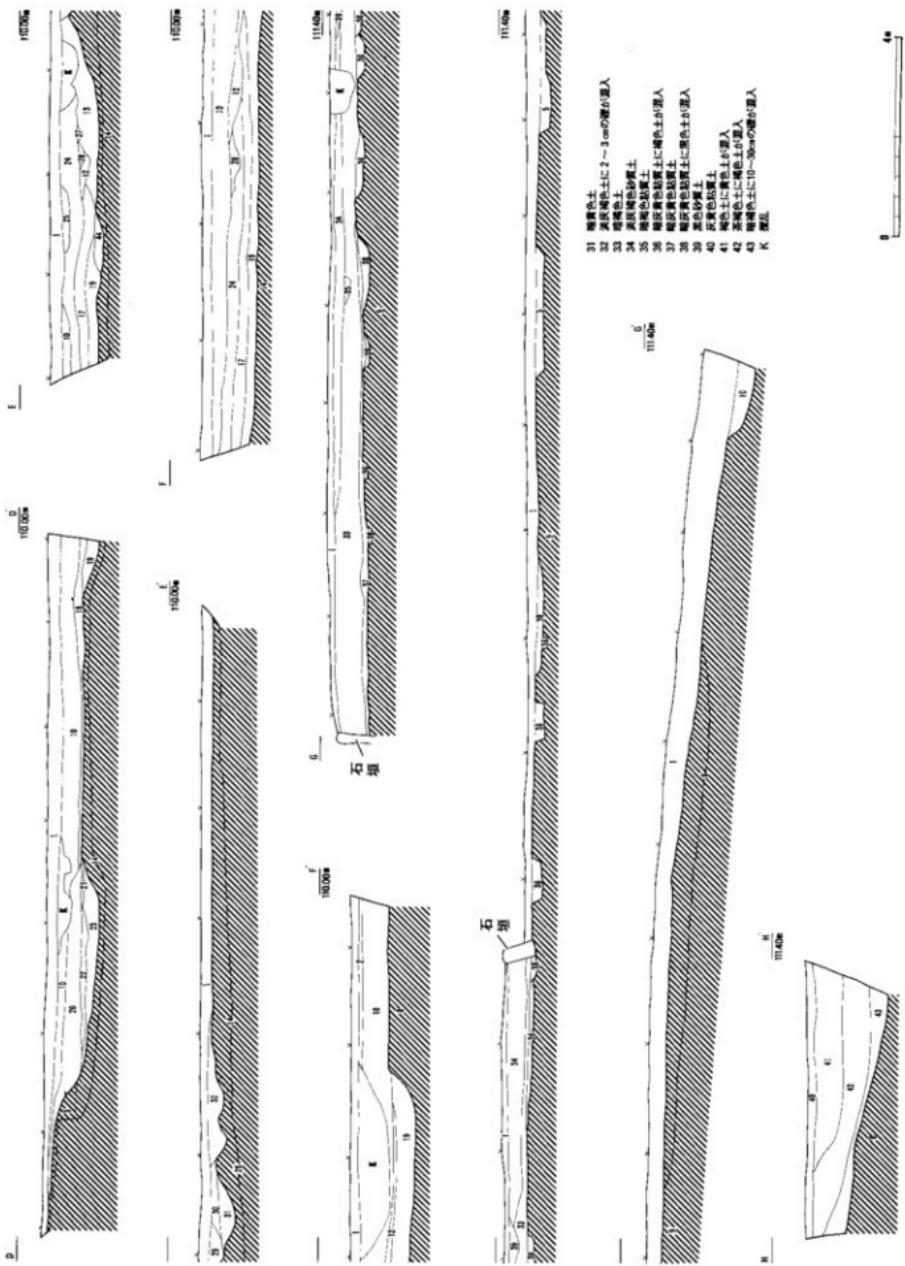
S D 9 D地区のi 3～f 10のグリッドにかけて、約28mの長さで検出した南北溝である。幅約0.3～0.5m、深さ約0.3m前後で、底は概ね平坦である。検出された部分は、D地区の北隅から南隅をほぼ直行し、方向はN24°Wである。埋土は黒褐色土であり、若干の中世土師器片が出土した。S D 9は中世の区画溝の可能性がある。

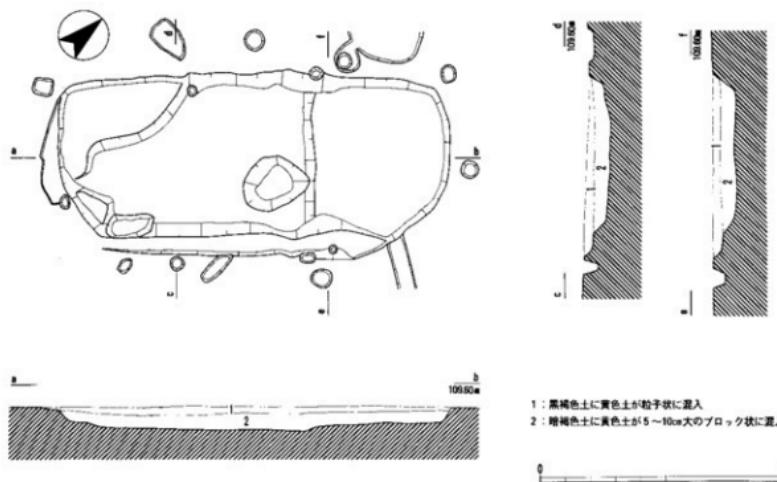
S D 11 C地区北西部からD地区南東部で検出した溝で、h 16～g 9グリッド部分にかけて約30m、D地区h 9～f 9グリッドにかけて約6m部分を確認した。幅は約0.3～0.5m、深さは約0.1～0.2m、埋土は暗褐色土に10～20cmの礫を含む。C地区からD地区にかけて北西方向に続いた後、D地区h 9でほぼ直角に南西へ方向をかえており、なんらかの区画溝と思われる。h 16～g 9グリッド部分の方向はW38°N、h 9～f 9グリッドの方向はN39°Wで、S K 17と方向が一致する。中世の陶器壺片が出土した。S D 11は中世の区画溝の可能性がある。

S D 18 C地区のg 21グリッド付近で検出した溝である。S K 17の東隅から南東へ向かい、約1mの地

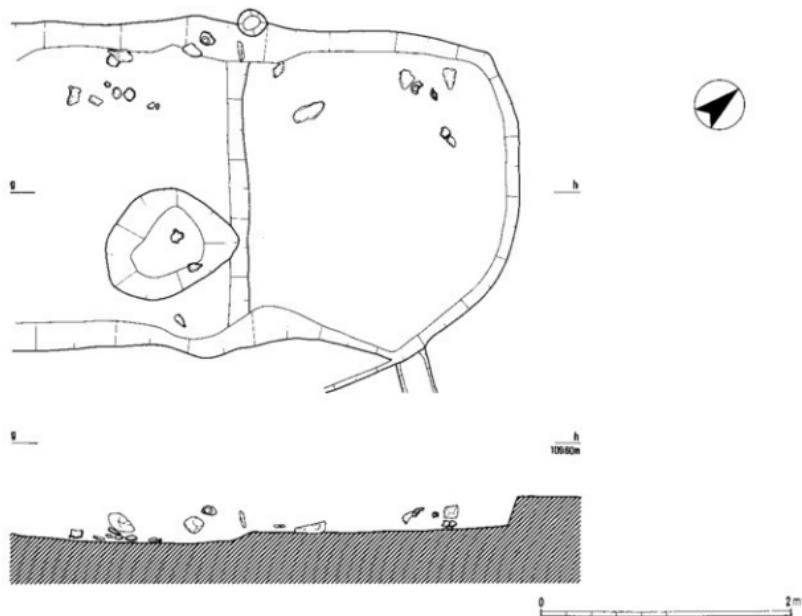


第6図 調査区土層断面図(1:100)





第7図 SK 17遺構実測図 (1:80)



第8図 SK 17遺物出土状況図 (1:40)

点で方向を北東へ変え、約2m続いた後に擾乱に切られる。幅約0.3~0.5m、深さ約0.05~0.1mである。SK17と重複するが、切り合い関係は不明である。あるいはSK17に関連するものかもしれない。

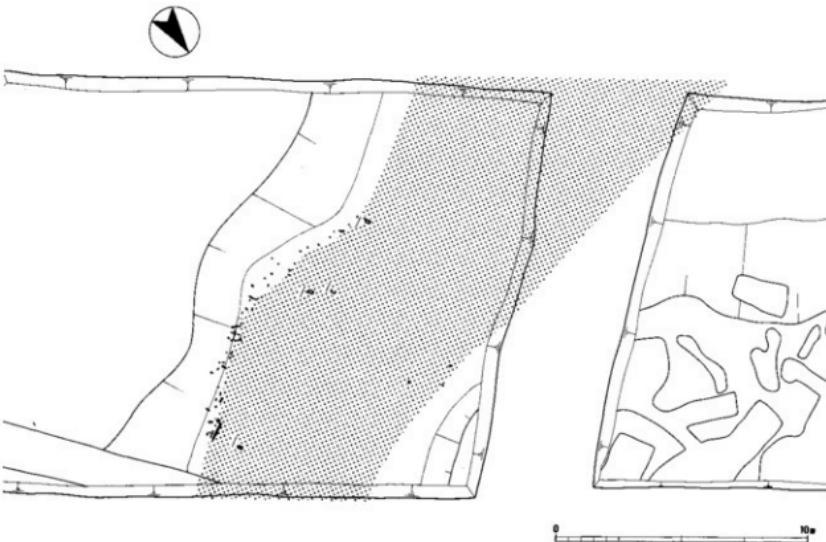
c. その他の遺構

SZ19 A地区の東端、h52~e55グリッドにかけて検出した沼状のものである。暗褐色粘質土に暗褐色の砂が混じる埋土で、調査区内では0.5mの深さがある。かつての谷部分であったと思われるが、時期は不明である。

SZ20(第9図) B地区西半分からC地区南東隅、h32~e23グリッドにかけて広がる谷状の地形で、遺構検出面からの深さは最深部で約0.8mを残す。中央部分に幅7m前後の流路が蛇行していたと思われ、流路の両岸には護岸のための杭が打ち込まれていた。杭は北岸で3本、南岸で61本を確認した。南岸の杭は、2列以上平行して打たれたと思われ、その並びは流路が蛇行する状況に合わせたものと考えられる。北岸は確認した杭の数が少ないため明確には言えないが、南岸と同じ様な状況であったのだろう。また杭は、若干傾くものもみられるが、概ね地面对し

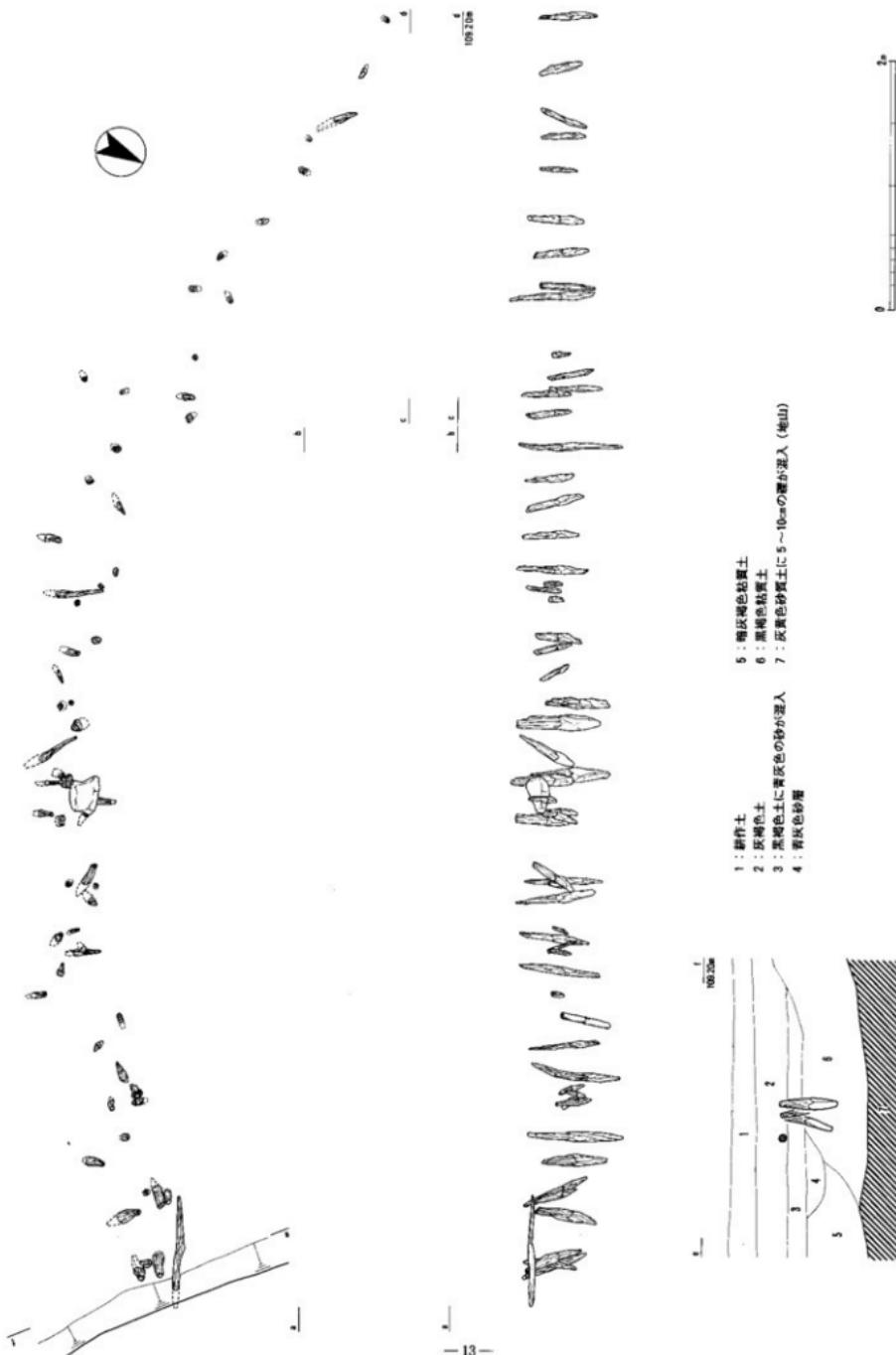
て直角に打ち込まれたと思われる。杭は径10~15cm、残存長20~80cmで、ほとんどが針葉樹の小径木や割材の先端をナタ状工具で加工したものであるが、竹を使用したものも1本確認した。なお、遺構検出の際には流路を確認することはできず、SZ20の埋土を掘削した後の土層断面観察で、両岸の杭付近に堆積した青灰色砂層の間を流路と推定した。周囲の地形の状況から、流路は西から東へ流れていたものと思われる。土層断面観察の結果、砂層以外の流れは緩やかなものであったと思われ、長い時間をかけて谷部分に土が堆積し、近年まで沼状の土地となっていた。杭列付近の流路側から、土師器皿・鍋、山茶碗、天目茶碗等若干の中世遺物が出土したが、SZ20の杭列の岸側や、流路中心付近からは、遺物は出土しなかった。出土した遺物は13~16世紀のものと思われるが、これらの遺物は西側斜面からの流れ込みの可能性もあるので、SZ20の杭列の時期は特定できない。

この他に、D地区のh4グリッドで検出したPitAは径約0.7m、深さ約0.2mで、若干の中世土師器片が出土した。また、1/2しか検出できなかったが、



第9図 SZ20流路想定図(1:200)

第10図 SZ 20杭排列部分構造図 (1:40)



g 10グリッドにあるpit Bは、pit Aとはほぼ同規模と思われる。この2つのpitの埋土は同一である。

また、SK 17の周囲にはいくつかの柱穴を検出したが、建物としてはまとまらなかった。

その他、D地区のh 6グリッド付近のいくつかの

小穴や、C地区的f 12・13付近の小穴は、建物としてはまとまらなかった。

上記以外のA・C・D地区にある土坑状や溝状のものは、近年の耕作に伴うものや、地山の凹凸等と判断した。

IV. 遺物

調査によって出土した遺物は、SK 17等から出土した中世の遺物が主なものである。この他には、A地区から若干の縄文時代の石器が出土した。

石器（第11図）

全てA地区から出土した。

尖頭器（1）はチャート製で、f 46グリッド包含層中から出土した。両側縁がシャープさを失くすこともあり、残存部分は基部と思われる。おそらく、形態は柳葉形のもので、先端部から1/2程度が欠損するものと思われる。残長5.4cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmで、重量は13.9gである。

石鎌（2）はサヌカイト製の凹基無茎鎌で、SK

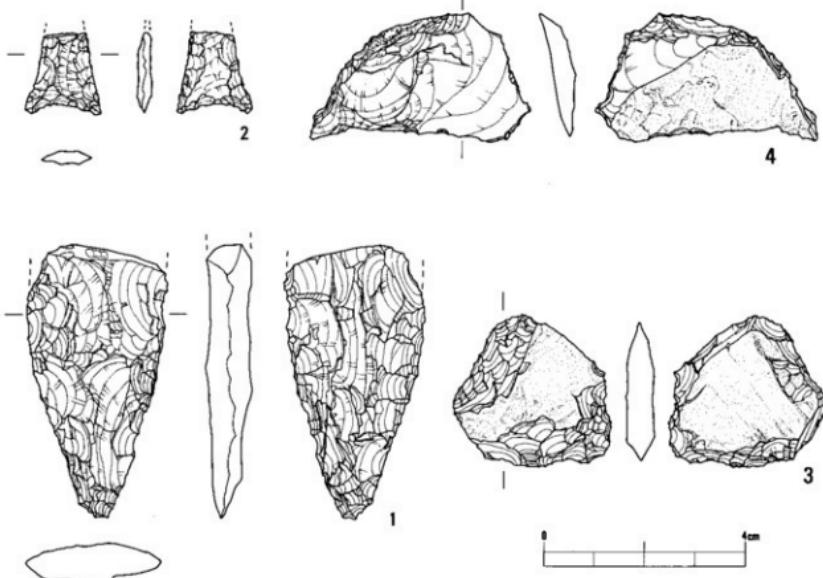
物

2から出土した。先端部を欠損する。残存長1.6cm、幅1.5cmで、重量は0.59gである。

3はチャート製のもので、h 49グリッド包含層中から出土した。両面の3方向に、比較的安定した2次調整が認められ、削器の可能性がある。長さ3.0cm、幅3.1cm、厚さ0.6cmで、重量は6.58gである。

4はチャート製のもので、f 46グリッド包含層中から出土した。一部に2次調整と錐状の突出部が認められる。また、2辺に刃こぼれも認められる。長さ2.5cm、幅4.35cm、厚さ0.7cmで、重量は7.27gである。

SK 17出土遺物（第12図）



第11図 出土石器実測図（1:1）

ロクロ土師器小皿（5） 内外面ロクロナデ、底部外面に回転糸切り痕が残る。口縁が中央部から若干内湾するが、口縁部外面に明瞭な稜は確認できない。

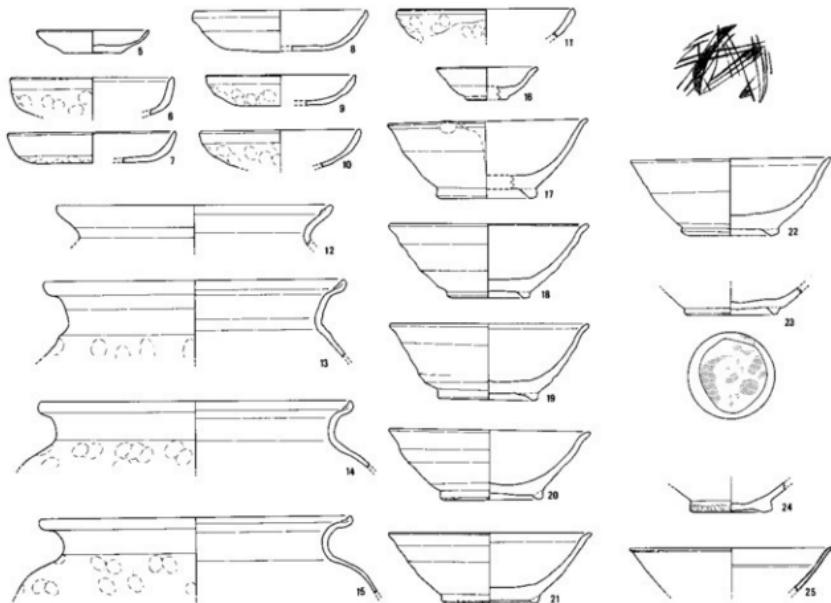
土師器皿（6～11） 復元した口径が11.8～13.8cmで、内面にナデ、外面にオサエ、口縁端部にヨコナデを施す、ただし8については、オサエの痕は明瞭ではない。ヨコナデがおよぶ範囲が比較的広いもの（6～8）と、狭いもの（9～11）に大別できる。

蚊山遺跡の土師器皿の細分を参考に分類すれば、6～8が土師器皿Aに、9・10が土師器皿B1に、11が土師器皿B2に相当すると思われる。また、6・7の胎土は他のものと比べて精良である。

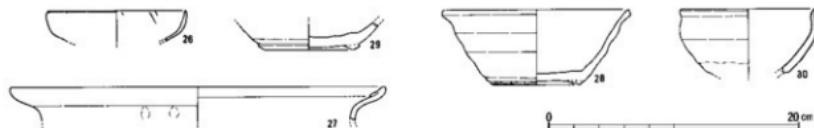
土師器鍋（12～15） 「南伊勢系土師器」の鍋と呼

ばれるもので、口縁端部を折り返し、口縁部と頸部にヨコナデを施し、体部外面にオサエがみられる。13～15は口縁部と頸部の区別が明瞭で、折り返し部分に施されたヨコナデの部分が窪み、14は端部が他と比べて若干立ち上がり気味になる。12は、残存部分が少ないともあるが、口縁部と頸部の区別が他と比べて明瞭ではない。また、口縁端部の折り返し部分に施されるヨコナデも、他と比べて弱くなっている。12は伊藤編年の第1段階a型式に、13～15は第1段階b型式に相当すると思われる。

陶器 山皿（16） 口縁端部はやや外反し、口縁部下部は丸味を帯びる。口縁中央部に、他の山皿の口縁端部破片が軸着する。藤澤氏による山茶椀編年の



第12図 S K 17出土遺物実測図（1:4）



第13図 S Z 20出土遺物実測図（1:4）

第5型式に相当すると思われ、渥美・湖西型と考えられる。

陶器 山茶椀（17～23） 17～22は、口縁部がやや外反し、体部は丸味を帯び、貼り付け高台を有す。口縁部径は15.7～16.0cmで大差はないが、高台径は、17・19・20が約8cm、21・22が7.7cm、18が6.6cmと、若干の差がある。17は口縁端部に輪花が残存し、潰け掛けした灰釉が認められる。また、20・21の高台には粉殻痕が認められる。22の底部内面には煤の様なものが斜行状に付着する。23の底部外面には墨痕の様なものが認められる。いずれも、藤澤氏による山茶椀編年の中第5型式に相当すると思われ、渥美・湖西型と考えられる。なお、17はやや古い形態を残している。

白磁椀（24・25） 24は削り出し高台部分のみで、底は厚く、削り出しあわざかである。25は口縁部分のみで、端部は外反し、内面に沈線が認められる。

[註]

- ① 前川嘉宏 「出土遺物の観察」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告 第6分冊—敷山遺跡左郡地区』 三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1993
- ② 伊藤裕掌 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』1 三重歴史文化研究会 1990
- ③ ④に同じ
- ④ 藤澤良祐 「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要』3 三重

V. 結語

今回の調査区は、A地区からB地区的東半分までは傾斜地である。S Z20の谷部分を挟んで、その北西方向のC・D地区周辺には、一定の安定した土地があつたものと考えられる。

当遺跡の南方約1kmには、足ヶ瀬遺跡と上ヶ所遺跡が位置する。足ヶ瀬遺跡は绳文時代早期の代表的な遺跡で、隣接する上ヶ所遺跡もほぼ同時期の遺物が確認されている。溝端遺跡は足ヶ瀬遺跡や上ヶ所遺跡と同一段丘上に位置し、また、A地区で出土した尖頭器（1）は绳文時代早期のものと思われる。溝端遺跡を含め、上ノ垣外遺跡、奥新田遺跡、百合遺跡等が、櫛田川が飯南町内で蛇行する地域に位置する。当遺跡付近は、绳文時代早期の人々の活動範囲であったのであろう。

B～D地区は地山部分が大きく削平を受けた上に、多数の擾乱があり、土坑S K17等の中世の遺構がわ

この他、青磁碗の破片等が出土した。

S Z20出土遺物（第13図）

土師器皿（26） 器壁は薄く、口縁端部は尖る。胎土に砂粒はほとんど含まれず、色調は白っぽい。敷山遺跡の細分では土師器皿Cに相当すると思われる。土師器鍋（27） 口縁端部を折り返し、ヨコナデを施す。「南伊勢系土師器」の鍋で、伊藤編年の第1段階B型式に相当すると思われる。

陶器 山茶椀（28・29） 28は体部がほぼ直線的で、口縁部外面が若干窪み、高台端部に粉殻痕が認められる。藤澤氏による山茶椀編年の第6型式に相当すると思われ、尾張型と考えられる。29も28と同様のものであろう。

陶器 天目茶椀（30） 体部下部はほぼ直線的で、口縁部は立ち上がり、口縁端部が外反する。藤澤氏による大庭編年の第5型式に相当すると思われる。

県埋蔵文化財センター 1994

- ⑤ ④に同じ
- ⑥ ①に同じ
- ⑦ ②に同じ
- ⑧ ④に同じ
- ⑨ 藤澤良祐 「瀬戸大窯の編年研究」『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要』 瀬戸市歴史民族資料館 1986

語

づかに存在するのみである。しかし、耕作土や第2層の擾乱土、さらに擾乱の中からも、概ね13世紀から16世紀のものと思われる土師器や陶器、青磁、白磁等の破片が多く確認できる。このことから、かつては今回確認した遺構の他に、13世紀から16世紀にかけての遺構が存在した可能性がある。

また、S K17とL字状の溝S D11は、その方向がほぼ同一である。あるいは、S K17及びそれに伴う遺構を、S D11が区画していたかもしれない。

溝S D9とS D11は、その方向から、同時期に存在したとは考えにくい。二つの溝から出土する遺物は、細片で少量のため正確なことはいえないが、S D11がS D9より先行すると思われる。

その他、調査区外南西方向の畠地には、土師器・陶器等中世の遺物が散布する。

これらの状況から、S Z20の北西部分には、13世

紀から16世紀にかけて、現在の仲組集落から今回の調査区を含めて、中世の集落が広がっていたのかもしれない。

また、SK17の時期は、粥見御園の存在が確認できる時期（11世紀から14世紀頃）と重なる。SK17と粥見御園の関係を直接証明するものはないが、13

世紀前後のこの付近は、伊勢神宮の勢力下にあり、伊勢神宮勢力の海運によってもたらされた東海産の陶器類も流通していたと考えられる。SK17から出土する山茶碗等はその一部と思われ、中には不良品と見られる山皿（16）が確認された。

遺物番号	器種	出土位置	計測値 (cm)	(残存度)	形態・技法・調査の特徴	色調	胎土
5 001-05	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 8.8 器 高: 1.8 底 径: 4.2	(1/4)	内外面クロナダ。底部外表面系切り窓。	SYR7/4にぶい橙	織物粒含
6 001-02	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 12.6	(1/8)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	7SYR7/4にぶい橙	織物粒含
7 001-01	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 13.2 器 高: 2.5	(1/6)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	7SYR7/4にぶい橙	織物粒含
8 001-07	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 13.7 器 高: 3.2	(1/4)	口縁部コナダ。内面底部ナダ。外面オサエ？。	2SYR8/3赤黄	織物粒含
9 001-04	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 11.8 器 高: 2.4	(1/8)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	10YR7/2にぶい黄橙	織物粒含
10 001-06	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 12.4	(1/2)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	10YR7/3にぶい黄橙	織物粒含
11 001-03	土師器 盆	E90 SK17	口縁部径: 13.8	(1/4)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	2SY8/3赤黄	織物粒含
12 002-02	土師器 瓢箪	E90 SK17	口縁部径: 21.8	(1/6)	口縁部コナダ。	10YR6/2黄褐	織物粒含
13 002-01	土師器 瓢箪	E90 SK17	口縁部径: 23.8	(3/8)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	7SYR7/4にぶい橙	織物粒含
14 002-03	土師器 瓢箪	E90 SK17	口縁部径: 24.6	(1/3)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	2SY8/2灰白	織物粒含
15 003-01	土師器 瓢箪	E90 SK17	口縁部径: 24.6	(1/4)	口縁部コナダ。内面ナダ。外面オサエ。	7SYR6/3にぶい橙	織物粒含
16 006-07	陶器 山皿	E20 SK17	口縁部径: 7.9 器 高: 2.6 底 径: 3.3	(1/4)	内外面クロナダ。自然輪竹着。山皿輪片附着。	7SY8/1灰白	織物粒含
17 004-04	陶器 山茶碗	E20 SK17	口縁部径: 15.8 器 高: 6.4 底 径: 8.0	(1/5) (1/3)	内外面クロナダ。口縁部輪花有り。貼り付け高台。濁け剥げ釉。	SY7/1灰白	織物粒含
18 004-02	陶器 山茶碗	E20 SK17	口縁部径: 15.7 器 高: 5.9 底 径: 6.6	(完存)	内外面クロナダ。貼り付け高台。	SY7/1灰白	織物粒含
19 004-01	陶器 山茶碗	E20 SK17	口縁部径: 15.7 器 高: 6.1 底 径: 8.0	(完存)	内外面クロナダ。底部外表面系切り窓。貼り付け窓台。	SY6/1灰	織物粒含
20 004-03	陶器 山茶碗	E20 SK17	口縁部径: 15.8 器 高: 5.6 底 径: 8.2	(完存)	内外面クロナダ。底部外表面系切り窓。貼り付け窓台。高台輪片に粘接痕。	SY7/1灰白	織物粒含
21 005-01	陶器 山茶碗	E20 SK17	口縁部径: 16.0 器 高: 5.5 底 径: 7.7	(完存)	内外面クロナダ。底部外表面系切り窓。貼り付け窓台。高台輪片に粘接痕。	SY7/1灰白	織物粒含
22 005-02	陶器 山茶碗	E90 SK17	口縁部径: 16.0 器 高: 6.2 底 径: 7.7	(完存)	内外面クロナダ。貼り付け窓台。内面底部に斜削痕。	SY7/1灰白	織物粒含
23 003-02	陶器 山茶碗	E20 SK17	底 径: 6.9	(完存)	底部外表面有り。	N7/灰白	織物粒含
24 006-04	白磁 瓢箪	E20 SK17	底 径: 6.6	(1/2)	ロクロケズリ。割り出し窓台。施釉。	7SY8/1灰白	織物粒含
25 006-05	白磁 瓢箪	E20 SK17	底 径: 6.0	(1/10)	施釉。内面に沈殿有り。	7SY7/2灰白	
26 006-08	土師器 盆	E91 S220	口縁部径: 11.0	(1/4)	内面オサエ。外表面ナダ。	10YR7/4にぶい黄橙	織物粒含
27 006-03	土師器 瓢箪	E29 S220	口縁部径: 29.8	(1/8)	口縁部コナダ。	10YR4/1褐色	織物粒含
28 006-01	陶器 山茶碗	E31 S220	口縁部径: 15.1 器 高: 6.0 底 径: 7.1	(1/8) (4/5)	内外面クロナダ。貼り付け窓台。高台輪部に粘接痕。	2SY7/1灰白	織物粒含
29 006-02	陶器 山茶碗	E20 S220	底 径: 8.1	(1/5)	内外面クロナダ。底部外表面系切り窓。	2SYB/1灰白	織物粒含
30 006-06	陶器 天日茶碗	E24 SK17	口縁部径: 10.7	(1/10)	ロクロケズリ。施釉。	SYR2/1黒褐 7SY7/1 灰白	

第1表 出土土器観察表



A地区全景（南東から）



A地区全景（北西から）

図版 2



B地区全景（南東から）



C地区全景（南東から）



D地区全景（北西から）



SK 17（北東から）



SK 17 挖削状況（南西から）



SK 17 遺物出土状況（南西から）



SK 17 (南東から)



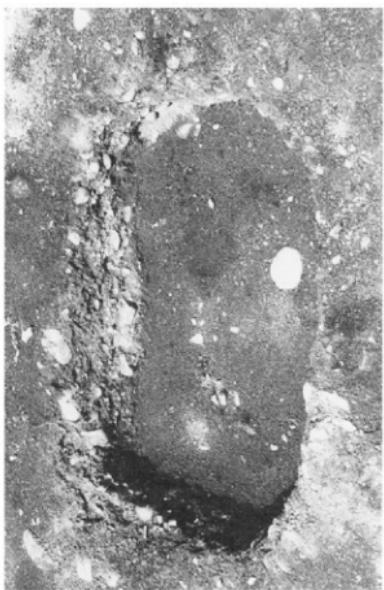
SK 17 遺物出土状況（南東から）



SK 2 (北西から)



SD 11 (南東から)



SK 1 (南西から)

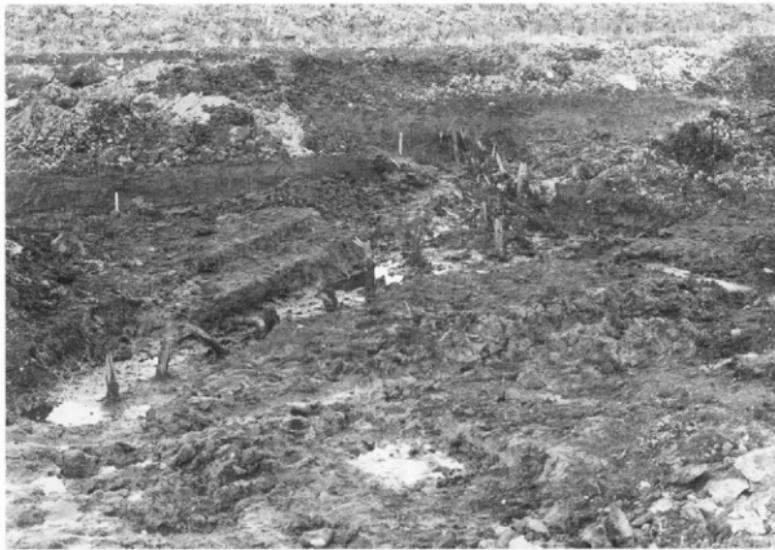


SD 9 (南から)

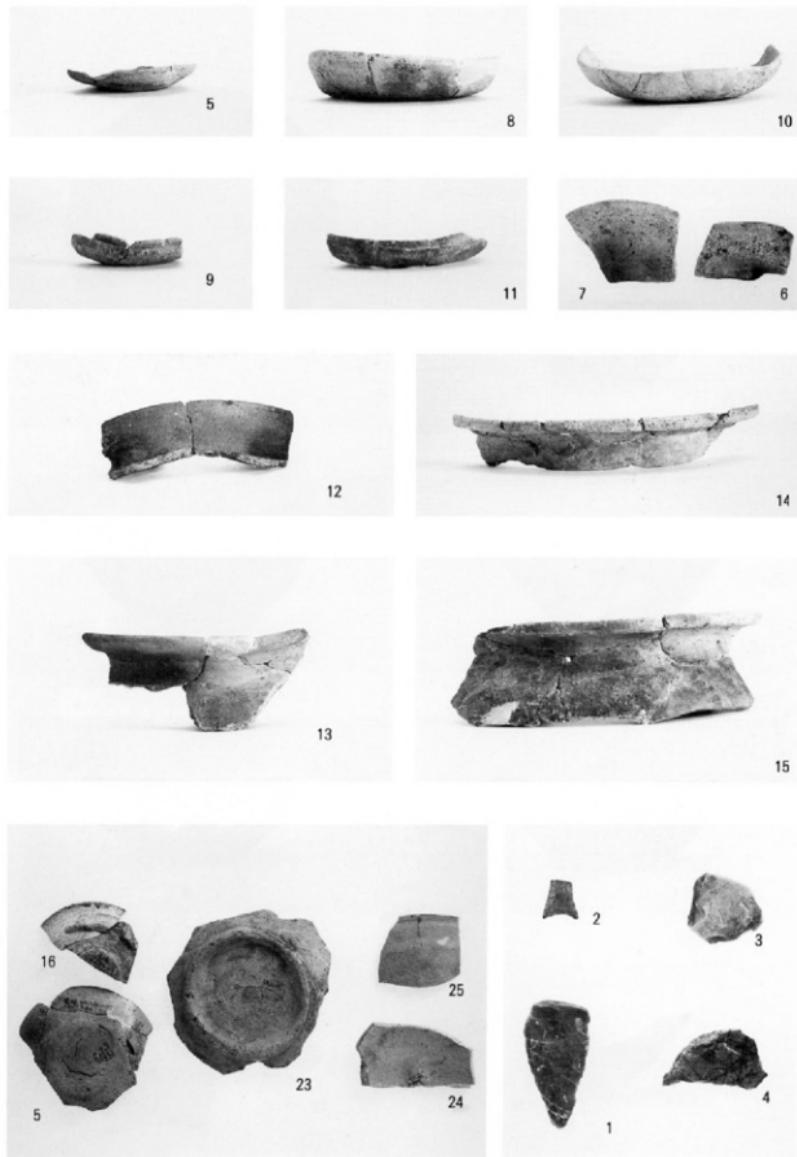
図版 6



S Z 20 桁列部分（北東から）



S Z 20 桁列部分（南西から）



出土遺物（石器類は 1 : 2、他は 1 : 3）

图版 8



17



18



22



19



22



20



21



28



30

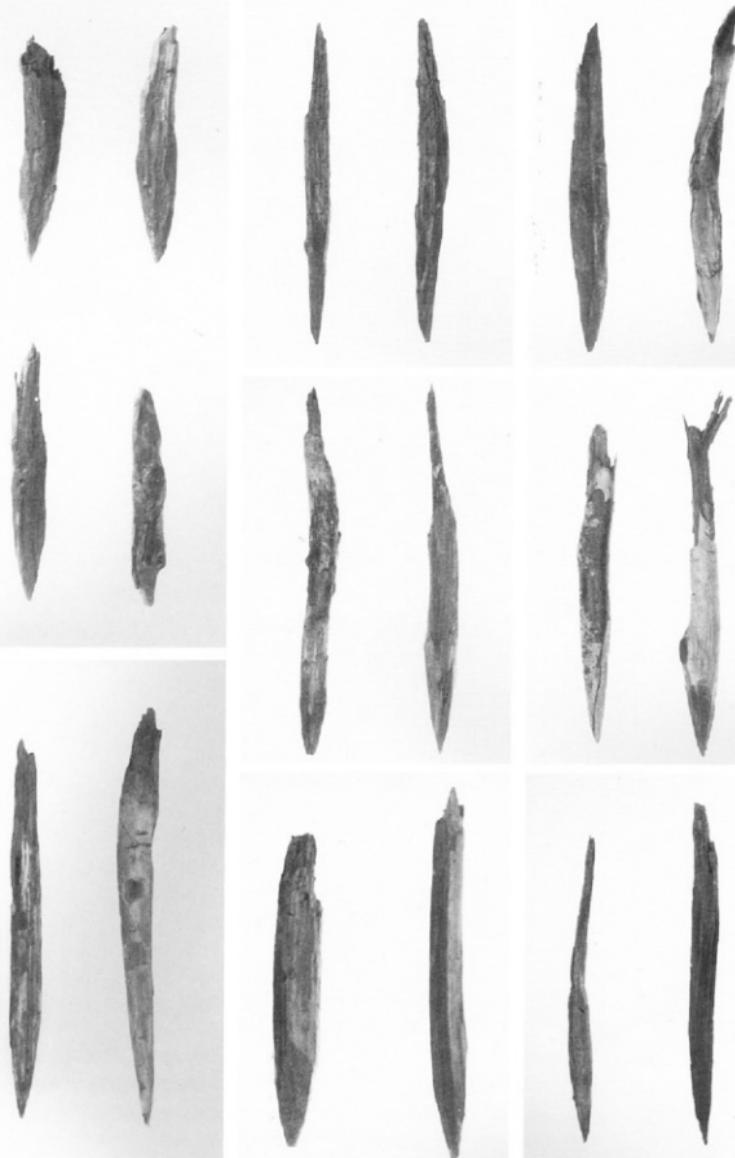


26



27

出土遗物 (1 : 3)



S Z 20 杭 (1 : 10)

報告書抄録

ふりがな	みぞばたいせき はつくつちょうさほうこく							
書名	溝端遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	140							
編著者名	筒井正明							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
溝端遺跡	三重県板南郡 いなみぐん 飯南町字 溝端・桜東 新田	2441	一	34° 26' 50"	136° 47' 50"	19950807~ 19951120	3,400	平成7年度一 般国道368号 線羽見バイバ ス国補道路特 殊改良工事事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項			
溝端遺跡	集落跡	縄文時代		尖頭器・石鏃				
		鎌倉時代～ 室町時代	土杭・溝	土師器（皿・鍋） 陶器（山茶碗・山皿） 白磁碗、青磁碗				

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 140

溝端遺跡発掘調査報告

— 飯南郡飯南町第見 —

1996年3月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
